

日本文化と仏教における坐の意味：鈴木大拙を中心に

About sit in Japanese culture and Buddhism: The focus of Daisetz Suzuki

1K05B054

指導教員 主査 志々田文明先生

越智 正志

副査 寒川恒夫先生

【はじめに】

「坐」と聞いて何を思い浮かべるだろうか。電車の中や机に向かって坐っている状況、または花見や居酒屋で床に坐っている状況を思い浮かべるのではないだろうか。この「坐」というものは「日常の主なる姿勢」であり、一般的には休息姿勢である。しかし、一方で坐禅修行においての「坐」は、突然、厳しい行として現出する。姿勢の一形態としての坐は、日本においてはどのようなものなのであるのか。また坐禅などの苦しい姿勢と考えられる「坐」は、日本仏教においてどのようなものなのか。本研究では、第一に坐の文化性を考察する。第二の課題は、鈴木大拙の坐についての考察を通して座の文化性について考えた。第三に、座の価値について、臍下丹田との関連で一流スポーツ選手の経験を事例に考えた。

【第一章 坐の文化】

立つことよりも楽であり、寝ることよりも苦しい「坐る」は単なる休息姿勢とはならないという視点を明確にし、日本の坐の文化について考察する。日本では元来から床坐の文化が発達していた。座具はしばしば登場するが、結局大正時代に国が椅子坐を啓蒙することにより明治以降に定着することとなり、現在にいたる。一方西洋ではキリストは立像が多く、また椅子坐が古くから活用されている。ゆえに「直立の西洋、坐の東洋」と分けることができ、日本と西洋の相違点がわかりより日本の「坐」を知ることができる。また仏教的観点、禅において坐禅

は重要なものとしてあつまっている。

【第二章 鈴木大拙の坐の考察】

鈴木大節は、国内外に仏教にかんする多くの著作物をだして、世界中にひろがる禅ブームの火付け役となった人物である。彼は坐についてあまり重要視していない。坐禅はあくまで一手段に過ぎず、公案の解明に達する手段としての坐禅であるとしている。一方、只管打坐を唱えた道元にとって、坐禅は仏門を全うするための唯一のものである。鈴木大拙は「坐禅」を公案に対して二次的なものであるとする。一方「坐る」についてはより重視している。大地は動かぬものの象徴であり、大地に坐ることは不動を意味するとし、この不動は最もたいせつなものであることから、彼が「坐る」を重視していることがわかる。

【第三章 坐の価値?臍下丹田との関係で】

坐の価値とは何なのであろうか。建築家ブルーノ・タウトが日本人の中心点は臍下丹田にあると言っている。この臍下丹田は実際武道などでは十分に今まで意識されてきたものであった。現在でも日本人の榎本喜八や松坂大輔などのプロスポーツ選手も、この臍下丹田を意識することによって成果を挙げていることがわかっている。一方弓術をやっていた西洋人では、感覚的に無関心であるという例が見られる。これらから臍下丹田は日本人が関心をもって価値を見出したものであることはいえよう。そこでは日本人は臍下丹田を安定、意識しようという感覚を

無意識的にもっている．それが日本人に床坐という手段を用いてさせてきたということが考えられる．"